

Kenneth King,

*Jua Kali Kenya : Change
and Development in an In-
formal Economy 1970-95.*

London : James Currey, 1996, xx+236 p.

うえ た げん
上 田 元

はじめに

著者のK・キングは、エジンバラ大学アフリカ研究センター長を務める国際比較教育の教授であり、ケニアのインフォーマル・セクター（以下ISと略記）を技術修得の観点から検討した1977年の著作^(注1)などによって著名である。前著では、この国の最大部族であるキクユの人々の中からIS製造業に従事する男性を選んで考察したが、今回の新刊書は、これらの職人たちのその後を追うために1987年から数年間にわたって行われた研究の集大成である。その場限りの調査に基づく議論が支配的なIS研究の中で、ほぼ20年間の変化を追跡したキングの個人史アプローチは際立っている。彼の前著にも触発されてケニアの零細企業の変化を6年にわたり継続調査している評者の関心は、彼が前著で積み残した課題に対して、本書でどう答えているかという点に尽きる。

前著は、学校教育制度外での職業技術修得への関心と、学卒者であふれかえった都市での雇用問題を解決する切り札として1970年代初頭に開始されたIS研究とを結びつけるものであった。前著によれば、1963年のケニア独立後に創設された各種の公的職業訓練制度によって技術を修得した者は、ごく少数であった。他方、フォーマル・セクター（以下FSと略記）、とくにインド系企業での見習は、30年代にはすでにアフリカ人が技術を獲得する重要な道となっていた。キングは、ナイロビとその北隣キアンブ県の一村で、自転車の荷台、手動工作機械、灯油ラン

プなどを製造するキクユ職人の経歴を検討し、彼らがFS企業から独立した後、弟子の参入・退出を厳密に規制することのない開放的で非公式な徒弟制を通して、多数の職人を生み出し始めていることを見出した。彼は、このような技術修得様式のもとで労働集約的で即興的な生産を行うのがISであると述べ、これを単に公式統計から漏れた部分であるとはみていない。また、公的訓練制度と非公式な徒弟制の間にはさまざまな形態があり、FS/ISの二分法的理解に問題があることをすでに指摘していた。

ところで、キングは、門戸開放型の徒弟制について、次の2点を長期的に検討すべきとしていた。第1に、この徒弟制を通して職人が増え、競争が激化すれば、それに応じて事業収入は減少して事業の規模拡大が困難となるのか、あるいは、競争を制限するために徒弟制の開放度は低下し、雇用創出力も減少するのか。第2に、この訓練制度を通して主として単一品目の生産技術を獲得した弟子たちは、独立後により上位の技術水準へと垂直的に脱皮することができるのか。これらが残された検討課題であった。

I 本書の構成

さて、今回の新刊書は、キングに個人史を提供した職人たちの16枚のカラー写真をはさんだイントロダクションと2点の地図に続いて、以下のように書き進められている。

- 第1章 インフォーマル・セクターからジュア・カリへ——零細企業発展のケニア化——
- 第2章 ナイロビのジュア・カリ化
- 第3章 1990年代初頭のギコンバにおける工業の多様性
- 第4章 ケニア農村のジュア・カリ再訪
- 第5章 ケニアにおける自営のための教育と訓練
- 第6章 より広い文脈におけるケニアのジュア・カリ

「ジュア・カリ」という言葉は、スワヒリ語で「刺すような陽射し」を意味するが、同時に慣用句として、「屋外で額に汗して働く職人たち」（とくに金属

加工職人や自動車修理工)をもさす。第1章は、ケニア政府がこの言葉をIS零細企業(商業を除く)を言い表す用語として政策に盛り込む経緯を解説する。第2～4章は、キングが1970年代初めに調査したキクユ職人たちを再訪して彼らの就業歴を白黒写真入りで振り返り、また他企業についても検討して、20年間の変化を見定める。第5章は、この期間に並行した公的教育・職業訓練の改革を展望し、これが職人たちと接点をもっていたのかどうかを検討する。そして最終章は、本書の論点を広く位置づけ直し、残された研究課題を提示している。

キングが20年間の変化として最も強調しているのは、革新的な職人の間に芽生えた「技術的自信」(technological confidence)である。これは、ある製品を完成させるために材料や仕組みについて理解し生産を実行する能力、あるいは「俺でもできる」(can-do)型の態度のことである。どのくらいの職人たちが、こうした自信に支えられて生産を拡大し、あるいは多様化しえたのだろうか。そもそも、この技術的自信はどのようにして形成されたのだろうか。その際、公的制度の役割はどのようなものであったのだろうか。これらの問いは、キングが前著で示した第2の検討課題を引き継いだものである。

II 内容紹介

1972年にILOがケニア経済にIS概念を適用し零細企業育成を提唱して以来、この国のISについては研究・実務の両面で多くの蓄積があり、著者は第1章でこれを概観する。

まずケニアのIS研究においては、1970年代が外国人の独壇場であったのに対して、80年代にはケニア化が進んだ。ケニア化の第2局面は、政府によるIS政策の立案である。1985年に大統領がナイロビの一地区カムクンジの職人を訪問し、彼らに作業小屋を建設して与えるという象徴的行為を行ったのに続いて、翌年の議会文書「成長再生のための経済運営」(Economic Management for Renewed Growth)において、政府はようやくIS支援の積極的姿勢を見せ始める。そして1988年のジュア・カリ担

当省(Ministry of Technical Training and Applied Technology)設置、ILO、UNDPとの協議を経て、92年に議会文書「ケニアにおける小企業およびジュア・カリ開発」(Small Enterprise and Jua Kali Development in Kenya)が策定された。操業用地整備や資金援助を通して、小企業に対してその可能性を発揮させる環境を創出し、企業家精神を育む教育を行うことが必要とされた。

ケニア化の第3局面は、策定された支援策に対するジュア・カリ職人の参画であり、これは操業用地を獲得することを主な目的とした組合づくりの形で進みつつある。世界銀行も、公共部門削減による失業増への対処、民間活力利用、そして貧困緩和という観点から、この組合を通して援助を開始した。

このようなISのケニア化の3段階それぞれについて、キングは問題を指摘している。まず、大学の財政難や教育負担増の中で、ケニア人研究者は長期にわたりIS研究を続けることが困難になっている。また、政策化において国際援助機関が果たした役割は大きく、職人への財政的支援もこれらの機関やNGOに大きく依存している。さらに、誰が真のジュア・カリなのか現場において曖昧なうえ、多様な職人層が一つの組合に混在しており、生まれて間もない組織率の低い組合と、それを束ねる「ケニア全国ジュア・カリ連合」の方向性は不明である。結論として、研究や調査報告はこの20年間に枚挙にいとまがないほど増加したが、ジュア・カリ職人たちの声は依然として政策には反映されていない。

キングが本書で示そうとしたのは、皮肉にも一外国人としてそうした職人たちから得た貴重な情報である。第2章は、まず首都ナイロビのジュア・カリを概観する。彼は、石造りの恒久的なものであれ、木造の一時的なものであれ、作業場のような稀少資源を、柔軟に、多用途に、最大限に用いて(flexible diversification, multiple utilization)生産するのが、ISないしジュア・カリの本質であるという観点をつけ加えている。他人の石造りの小工場に寄生して電力を利用する職人がその例である。続いて、旧知の職人について20年間の変化が検討され、ギコンバ地区の工作機械製造職人の間には「企業家的自営」

段階へと脱皮した者がみられるのに対して、カムクンジ地区の灯油ランプ製造職人は押し並べて「自給的自営」段階に留まっていることが指摘される。

まず、電化された石造りの工場が立ち並ぶギコンバで、キングは8人の職人に再会した。ほとんどは農村とのつながりを強く保ち、なかには事業収益を耕地購入に分散させた者もあった。最も成功している職人の場合、工作機械製造に加えて、飼葉を切断する農家用機具をはじめとして、輸入品に対して比較優位な製品ニッチを開拓していた。そして、工業水準を脱しないものの、ラジオなどで製品を宣伝し、新興工業地帯にも作業場を開設するまでになっていた。この場合、「技術的自信」はかつてのFSでの就業経験に由来していた。

他方、電力が利用できるのにもかかわらず、資本不足のために手動の機械に頼り、他のジュア・カリ職人たちと比べてとくに優れているとはいえない例などが紹介される。またかなりの職人は、共通して、インド系卸売商による大量発注と迅速な支払が、アフリカ人商人の少量買付・運配とは対照的に、事業にとって非常に重要であると感じていた。

1970年代初めにはごく少数であった工作機械製造職人の次に、著者はジュア・カリの典型例として、空缶を利用した灯油ランプ職人に会う。大統領が作業場を建設したものの電力は引かれていないカムクンジ地区が対象である。彼は、やはりインド系企業で技術を修得した旧知の職人を訪問し、事業は若い世代に受け継がれつつあること、技術が単純明瞭で需要も堅調なため市場の独占は困難なこと、しかし依然として単一製品に特化し技術にも変化がないこと、その背景には毎日働きづめで製品改良・開発の時間がないという悪循環があることなどを見出した。

続く第3章において、キングは1970年代初めには少数の職人のみがあった工作機械製造の技術が、20年の間にギコンバ全体に普及し多様化していったことを指摘する。その代表例が、木工用電動旋盤の製作技術である。先行の手本をもたない第一世代の職人たちは、FS企業で就業経験を積むなかで、独立起業に十分な「技術的自信」を身につけていった。そして1980年代初めには、インド系企業が所有して

いた旋盤を複製するに足る実行力をもったジュア・カリ職人たちが増加し、彼らによって電動旋盤の製品化が達成されていた。これは、輸入された技術に頼るのではない、技術の現地化、あるいは第2段階の輸入代替である。そして、生み出される工作機械の種類は多様化すると同時に、それらはギコンバのジュア・カリ家具製造職人の間に普及し、金属加工部門と関連しながら彼らも数を増やしていった。家具製造職人にとっても、インド系企業での就業経験は技術修得において重要であっただけでなく、これらの企業は独立後の下請元として彼らの自立を促した。

ギコンバ職人は、当局による作業用地配分を除いて、公的援助をほとんど受けていない。政府が奨励するジュア・カリ組合についても、加入者が少数である上に、主要業種である金属・木材加工関連の組合員の比率も少ない。そして、彼らの大部分は自らが政府から支援されているとは考えていない。キングは組合のこうした限界を承知の上で、組合員に対して政府が行ったアンケートを分析し、ギコンバの職人企業の資本・人員規模が、灯油ランプ職人などの本拠地であるカムクンジよりも際立って大きいことを見出している。しかし、ギコンバの徒弟制のもとで育ちFS就業歴のない第二世代以降の職人たちが、今後より上位の「技術的自信」に達することが果たしてできるのかという疑問を、著者は呈する。

第4章は、キングがやはりかつて訪れたキアンブ県の一農村ギジガの交易センターに舞台を移す。ここは著者が1970年代にナイロビで出会った何人かの工作機械製造職人たちの故郷である。ここでも、政府との関連は組合化以外の点ではほとんどなく、その組合も村のジュア・カリ業種構成を適切に反映していない。著者の調査によれば、ジュア・カリ自営に参入しようとする流れは現在でも続いており、また村の男性の多くが何らかの形で金属加工、とくに地元建設業界に納入する金属製の各種部品の製造に手を染め、20年の間に地元でえられる製品・サービスも大幅に拡大した。その中で、購入した電動機械の仕組みを理解して自分なりに製造する「技術的自信」も、村の電化や道路整備、購買力の上昇にも支えられて形成されてきた。再会した工作機械製造職

人たちの間には、融資を受けて設備投資し、手動・電動工具を併用しながら生産を大きく拡大した例もみられた。

また、キングは改めて、FS雇用やインド系卸売商の重要性を指摘し、これらはアフリカ人職人の発展をとくに意図したわけではない通常の商売の一環であって、それだからこそその恩恵は持続的でありえたとしている。ただし、ジュア・カリの中核にある価値（勤勉、発明の才、自助、個人主義など）は19世紀以降のキクユの人々のものであり、これをケニアの他の社会に当てはめるのには問題があると指摘されている。なお本章は、女性も従事するギジガの衣類製造・修繕について、一節を設けて論じている。

職人たちの生のデータを用いた議論は以上で終わる。続く第5章は、ジュア・カリ就業をも念頭において1985年に導入された職業訓練の実技を重視する学校教育制度の改革や、60年代に若年失業者が急増し始めた際に設立された青年工芸学校 (Youth Polytechnic) などにおいて80年代後半に摸索され始めた企業家精神の育成が、現実のジュア・カリといかに関連しているのかを考察する。結論は、第2～4章で示された職人たちの「技術的自信」の形成が、以上のような学制改革とは無縁のところで行った「静かな革命」であったというものである。

もっとも、導入後10年を経過したばかりの改革と技術修得の関係について最終的な判断をくだすのは時期尚早である。また、職業訓練校においては、既存職人の技術・企業家精神の育成と新規学卒者の訓練の比重を今後どうすべきかという問題がある。多くの訓練計画を実施している NGO も外国からの援助に依存しており、計画を現地にいかに根づかせるかという課題を抱えている。その上で、FSでの「技術的自信」獲得に匹敵する訓練をいかにに行い、既存の自信をジュア・カリ企業の内部にどう持続させ、またFSとのつながりをどう維持していくかを考えていかなければならない。

最後の第6章では、(1)企業家的自営と自給水準に留まる自営は、全く別個のものであるというよりも、一つの世帯の中に分業・多就業構造をなして共存しうるし、一個人の就業歴の中にも積層・継起しうる

こと、(2)文化、とくにエスニックな要因がジュア・カリの発展に及ぼす影響や、インド系工業の動向に関する研究が著しく不足していること（キクユ職人のみを扱った本書もこの問題を克服していない）、(3)多様化し成長するFSの近代工業部門なしにジュア・カリ職人が技術を向上させ、繁栄できると確信をもつていうことはできないこと、(4)工作機械製造職人の一部は、輸入代替の第2段階に達し技術の変化も急速だが、大部分はまだ植民地時代後期のインド系工務店の技術水準に達していないこと、(5)第3点とも関連するが、ジュア・カリ振興を工業政策全体の中に位置づける政策的枠組みが依然として欠けていること、が指摘され、本書の締めくくりとされている。

III 評価

本稿の冒頭に紹介した1977年の著作が示した検討課題に戻って考えてみよう。

第1の、門戸開放型の徒弟制が競争激化を招き、自らの開放度を低下させていくのかどうかについては、明示的には考察されていない。需要に支えられて零細企業の細胞を次々と分裂させていったカムクンジの灯油ランプ職人の例に限れば、職人人口の増加にもかかわらず、徒弟・見習制は開放性を維持してきたということができよう。

キングが本書で主に考察したのは、むしろ2番目の、IS零細企業はより上位の技術水準へと脱皮することができるのか、という点であったといえる。既に明らかなおと、この20年間に若干の職人たちがそうした脱皮を経験したことが示された。著者は、職人たちがFS企業との間に結んできた関係を、彼らの「技術的自信」の形成、技術的脱皮と少数ではあるが事業の成功にとって、非常に重要なものとみている。とくに、成功しつつある職人たちがインド系企業を重要視しているとの指摘は、ケニアのアフリカ社会に根深い「インド系否定」の通念をくつがえすだけでなく、FS企業がIS企業を搾取して発展を阻害しているのかどうかをめぐる未決着の学問的論争に対しても、貴重な観点を提供している。

FS 企業と IS 企業の連関の肯定的側面を指摘した前著の論旨は、それを一般化することが本書の目的ではないにせよ、いっそう強化されたといえよう。

キングは同時に、IS 職人の即興的で有り合わせの技術は、彼らが自営に移行後の資本・設備不足という環境の中で、FS で得た「技術的自信」に支えられながら必要に迫られて編み出したものであると述べ、その技術を FS とは無縁の、それなりに優れたものであると美化して考えることに反対している。本書で指摘された IS 作業場の柔軟な多用途化も、こうした制限された環境に対応するための職人たちの戦略にほかならない。FS/IS の単純な二分法的理解は、両者の間の関連を捨象しがちなことや、FS 労働者と IS 完全自営者の間にあるさまざまな雇用形態をとらえることができないことなどが、多くの研究者によって指摘されてきた。キングも、そうした二分法的理解の難点を、技術獲得・変容が FS から IS へと連続しているという独特の角度から主張している。

次に、FS 就業歴がなく門戸開放型の徒弟制のみから技術を修得したより最近の職人層にとっては、公的職業訓練機会がこれまで以上に重要となるかもしれないというキングの見通しは、ケニアの零細企業の発展方向にとって重要かつ深刻である。彼が示唆するように、ジュア・カリ内で完結する実地訓練からジュア・カリを超える「技術的自信」が生み出される可能性は、一見して低いように思われる。この認識を踏まえて、彼は公的制度を点検しているのだが、残念ながら本書はそのあるべき姿を具体的に示しているとはいえない。

さらに、これまでのジュア・カリの展開自体、キングが指摘したように、公の制度や政策的支援とはほとんど無縁の「静かな革命」であった。そう考えた場合、公的制度の模索だけでなく、ジュア・カリ内部の徒弟制の可能性についても、一層実証的に考察していくことが必要であろう。現在進捗しつつある組合化がジュア・カリ内訓練にどのような影響を与え、また公的訓練を受けた若者を弟子とすることによってその訓練・生産はどのように変容するのかといった問題が、今後の検討事項となるのではないだろうか。

しかし、キングはジュア・カリの徒弟・見習制について、その構造と動態を実証的に分析してはいない。本書は、独立前の弟子たちに関する記述に乏しいのである。彼は、個人史を再構成するという優れた手法に頼りながらも、それを事業主に限っている。さらに、20年近くを隔てた2時点間の比較では、その間を満たしているはずの弟子の出入りや変化の過程を連続して追跡することができない。確かに、カムクンジの歴代の職人たちが灯油ランプのみを不変の技術で製造しつづけてきたことは、ジュア・カリ内実地訓練の限界を間接的に物語っているが、それは結果であって、そうなった過程の分析は十分でない。とくに、より革新的な企業を含む工作機械製造部門における企業内動態や徒弟制の可能性については、検討の余地が多く残されているといつてよい。この空隙を埋めることは、キングが前著で示しながら本書でも背景に退いている第1の課題に対して、直接に答えることにもつながるであろう。

もちろん、本書が提供する分厚い情報と説得力ある分析は、以上の点を欠くからといって無効となるほど弱々しいものではない。そもそも、継続的調査に基づく動態の把握が少ないということは、単に本書の欠点であるというよりも、世界の IS 研究一般が抱えてきた問題点であるといえよう。ここで、キングの個人史アプローチの豊かさを改めて強調しておかなければならない。ケニアに限ってみても、彼の所論は、IS の概念を世界に広めた ILO のケニア雇用ミッションとほぼ同時期に研究を始めながらもその影響を受けることは少なく、また並行して行われてきた小企業研究とも一線を画しており、この研究分野の幅を広げることに大きく貢献している^(注2)。

(注1) Kenneth King, *The African Artisan: Education and the Informal Sector in Kenya* (London: Heinemann, 1977), viii+226 p.

(注2) ケニアでの研究動向については、拙稿「ケニアにおけるインフォーマルセクターの研究動向」(池野旬編『アフリカ諸国におけるインフォーマルセクター——その研究動向——』(所内資料)アジア経済研究所 1996年) 1~34ページ、などを参照されたい。

(大東文化大学国際関係学部講師)